

広島大学中央図書館浦文庫所蔵 『満洲語ヲ学ブ初歩 (manju gisun tacibure tuktan bithe)』について

On the Manchu Textbook *Manshugo o manabu shoho* (*manju gisun tacibure
tuktan bithe*) in the Ura Collection of Hiroshima University Library

松 岡 雄 太
Yuta Matsuoka

In this paper, I will provide a more detailed analysis of the contents of *Manshugo o manabu shoho*; abbreviates it as *Shoho*, which is in the Ura collection of Hiroshima University Library. As Uehara (1966) pointed out, most of the contents in *Shoho* can be found in *Man-Meng-Han Sanwen Hebi Jiaokeshu* (満蒙漢三文合璧教科書); abbreviates it as *Kyokasho*. This paper pointed out that there are some misunderstandings in Uehara (1966) regarding the correspondence between *Shoho* and *Kyokasho*. On the other hand, some sections in *Shoho* cannot be referenced in the *Kyokasho*. This paper argued that the Manchu examples in these sections may not only reflect the author Watanabe's experience learning Manchu and living in Manchuria, but also show how Watanabe thought Manchu grammar should be taught to beginners.

キーワード

Ura Collection (浦文庫), Manchu Textbook (満洲語教材), Osaka Foreign Language School (大阪外国語学校), WATANABE Shigetaro (渡部薫太郎)

1. はじめに

1921 (大正 10) 年開校の大阪外国語学校¹⁾は開校当時、支那語部、蒙古語部、馬來語部、印度語部、英語部、仏語部、独語部、露語部、西語部の 9 語部を有したが、うち蒙古語部では、モンゴル語と中国語に加え、満洲語の履修も必須としていた。満洲語の授業は 2・3 年次にそれぞれ週 1 時間行なわれ²⁾、この授業を担当したのは渡部薫太郎 (1861-1936) である³⁾。上原 (1966) は渡部が満洲語の教授にあたって作成、使用した教材の一種として謄写版による『満洲語ヲ学ブ初歩』(以下、『初歩』)なるものがあつたと述べ、その内容について若干の言及をし

ている。しかし、『初歩』は国立国会図書館サーチや CiNii Research などでもいくら検索しても所蔵機関が見つからず（最終検索日：2025年3月31日）、少なくとも筆者はこれまでその内容について上原氏の論文を通じて知るのみであった。そのような中、筆者は2025年2月、『初歩』が広島大学中央図書館浦文庫に所蔵されているのを偶然知ることとなり⁴⁾、翌3月に同図書館を訪問、文献の閲覧、調査を行なった。その調査の結果、上原（1966）の言及には、一部誤認のあることが分かった。以下、本稿は、上原（1966）を修正・補完しつつ、『初歩』の内容に対するより詳細な考察を行なうものである。

2. 『初歩』の基本情報

2.1. 編著者

『初歩』は表紙に「満洲語ヲ学ブ初歩」と表題があり、その右側に「manju gisun tacibure tuktan bithe」とあるのみ、奥書もないので、編著者や刊行年月日などは分らない。上原（1966: 57）は『初歩』の編著者を渡部であると断定しているが、これは表紙裏の巻頭部分に載っている(1)の文から判断したものと思われる。大阪外国語学校蒙古語部で満洲語を教えたのは渡部薫太郎より他にないためである。

- (1) 本篇ハ大阪外国語学校蒙古語部ノ生徒ニ課セン為メニ編セル者ナリ。故ニ実用ヲ専ラトシ兼テ簡ヨリ繁ニ及サントスルヲ以テ、其ノ文章ハ極メテ卑近ナリ。且ツ卷末ハ必ズ和文ノ直訳ヲ附シ自修並ニ温習ニ便ニセリ。

訳文ハ逐字訳ナリト雖モ、名詞ノ主格ニハ邦語ノハ、又ハガニ相当スルテニハナシ。又形容詞ノ現在ニハテニハナシ。故ニ山ハ高イ、高イ山ノ如キ場合ハ何等変化モナク、添附スル語モナシ。

又名詞ノ第四格ハ第三格ニ通スルコトアリ。朝鮮語ノ夫ト同シ。

（下線と句読点は筆者による。旧漢字も新漢字に改める）

上原はまた、「大阪外国語学校蒙古語部第一回の卒業生である現蒙古語部主任精松源一教授⁵⁾によれば、同氏はこれを教科書として満洲語を学んだ由である」とも述べており、このことから『初歩』の編著者は渡部であると見て間違いはない。

2.2. 刊行年

上原（1966: 57）は『初歩』の刊行年を1923（大正12）年頃と述べている。これは『大阪外国語学校一覧』の内容からの推定であると思われる。すなわち、『大阪外国語学校一覧』から渡部が大阪外国語学校で満洲語を教えはじめたのは1924（大正13）年度であることが分かる

広島大学中央図書館浦文庫所蔵『満洲語ヲ学ブ初歩 (manju gisun tacibure tuktan bithe)』について (松岡)

ため、それに合わせてその前年頃までにはできあがっていたであろうとの見立てである。この見解に関しては筆者も大きな異存はない。だが、近年 (2022 年)、『初歩』の続編となる、同じ渡部の手による『manju gisun tacibure hacin -i bithe jai debtelin (満洲語教本 第2巻)』 (以下、『教本』) なる教材も存在したことが明らかとなった (松岡 2023)。『教本』には 1924 (大正 13) 年 8 月の識語があり 1924 年第 2 学期 (9 月) の授業から使用したことも分かっているため、『教本』の事案を鑑みたとき、『初歩』の刊行年も 1923 年ではなく、1924 年の第 1 学期 (4 月) 開始直前であった可能性はある。

2.3. 底本

『初歩』の底本は 1909 (宣統元) 年に中国で出版された『満蒙漢三文合璧教科書』 (以下、『教科書』) なる書物である。『教科書』は書名のとおり、満洲語とモンゴル語と中国語の三言語合璧の形式からなる満洲語の読本教科書で、編者は榮徳なる人物である。全 8 巻 10 冊 (巻 7 と巻 8 は上下 2 分冊)、各巻はそれぞれ 60 課 (7・8 巻は上下冊各 30 課ずつ) で構成されている。上原 (1966: 58-59) は『初歩』の「第十一以下は、第十四を除いて他はすべて「満蒙漢三文合璧教科書」 (manju monggo nikan ilan acangga šu -i tacibure hacin -i bithe — 満蒙漢の三つを合した文の教科の書物 — 宣統元年 (1909) 序) の第一巻にあるものから転載している」と述べている。上原はさらに『初歩』と『教科書』の対応関係についてかなり詳細に言及しているが、この点については以下の 3 章で詳述する。

なお、近年その存在が明らかとなった『教本』の底本も『教科書』であり、『教本』は『教科書』の巻 2 以降に典拠を求めることができる (松岡 2023)。現在、大阪大学附属外国学図書館には 3 帙の『教科書』が所蔵されているが、うち 1 帙は渡部が使用していたものと思われ、渡部の手によると考えられる書き込みも残されている (松岡 2024)。

2.4. 体裁

『初歩』は全 16 丁分量で、第 16 丁の裏面は裏表紙である。上原 (1966: 57) が「いわば前篇と後篇とでもいうべき 2 部分に分れる。第一から第十までと、第十一から第廿一までのそれである」と述べるように、全 21 課からなり、前篇 (第 1 から第 10) まだが 6 丁分、それに続く後篇 (第 11 から第 21) が 7 丁分ある。前篇、後篇ともにその体裁は「共に先に満州文を一括して掲げ、後に纏めてその和文を示している」と上原が述べているとおりである。各課の内部はさらに一定の文またはフレーズごとに番号をふして分割してある。満洲語の本文後ろにまとめられたその日本語の訳文にも同様の番号がふされており、それぞれが対応する形になっている⁶⁾。この分割番号は、その底本となった『教科書』において、満洲語の右側にある中国語訳の切れ目 (まとめり) に基づいてふされたものと考えられる⁷⁾。『初歩』の各課における分割番号は【表 1】のとおりである。

【表1】『初歩』の各課における分割番号 (筆者作成、以下同様)

第1	1～12	第7	1～12	第12	1～10	第17	1～16
第2	1～12	第8	1～12	第13	1～10	第18	1～15
第3	1～12	第9	1～8	第14	1～9	第19	1～11
第4	1～12	第10	1～9	第15	1～12	第20	1～13
第5	1～12	第11	1～11	第16	1～18	第21	1～15
第6	1～12						

後篇のあとには続けて、これも上原 (1966: 59) が述べるとおり、「最後に「動詞ノ変化」として arambi を例に、その活用語尾の各活用形を、その名称と和訳とを添えて示している」。動詞の活用変化に関する記述は約1丁半分量である。その内容を以下の(2)に示す。

(2) 動詞ノ変化 arambi

一	語根即命令法	ara	書ケ
二	直接法現在	arambi	我書ク, 彼書ク, 汝書ク
三	不定法	arame	書ク, 書ク可ク, 書クコト
四	過去又ハ過去分詞	araha	書キタリ, 書キタル
五	直説法未来	arara	書カン, 書カントス,
六	仮定法	araci	書ケバ
七	接続法現在	araki	書カント欲シテ
八	過去動詞状名詞	arafi	書キテ, 書イテ後
右ノ八種ハ基礎変化トス。他ハ語根又ハ幹綴ニ一定ノ接尾綴ヲ加フ。			
九	不完過去	arambihe	書キ居ツタ
一〇	不定過去	arahabi	書イタデアル
一一	完全過去	arahabihe	既ニ書キタリ
一二	仮定過去	arahabici	書キタリシナラバ
一三	反問状態	aracibe	書クガ, 書クト雖トモ
一四	許諾状態	aracina	書クカ書ケ
一五	希求又ハ命令法	arakini	書テモライタイ, 書キタイ
一六	名詞状動詞	arabime [sic.arambime]	書キ又, 書キ且
一七	同上	arambifi	書キシコト
一八	同上	aranggala	書キシ前
一九	被動又使役	be arabumbi	書カシム(ヲ)
		de arabumbi	ニ書カサレル
二〇	被動的使役	arambubumbi	書カサレル様ニスル

二一 動詞状名詞	araharangge	書イテ居ル者. 彼ノ書キタル.
形容詞		書イテ居ル. 書ク所ノ彼
二二 不定法的	arahale	書キシ所ノ
二三 副詞的動詞	araraleme [sic.araralame]	書カントシテ

左ハ陽性母音 A ノ語根ニアル動詞ノ変化トス。語根ノ母音ノ如何ニヨリ母音調和ノ規則ニ従フ。

(句読点は筆者によるが、原文の読点は「.」で記す。旧漢字は新漢字に改める)

上原 (1966) では特に言及されていないが、上記の (2) は Möllendorff (1892: 10) にある「PARADIGM OF ARAMBI TO WRITE」とそれぞれの語形の説明をもとに、その英語を日本語に翻訳したものと見て間違いない。取り上げられている 23 項目とその順序が一致するのみならず、8 項目と 9 項目の間に「右ノ八種ハ基礎変化トス。他ハ語根又ハ幹綴ニ一定ノ接尾綴ヲ加フ。」とあるのは、Möllendorff (1892: 9) において一つ一つの語形を説明する箇所でも 8 項目と 9 項目の間に挿入されている一文「The above eight are the fundamental forms; the 15 others are formed by adding affixes to them.」とも文言が一致する⁸⁾。

本節の最後に、上原 (1966) ではやはり言及されていないが、(2) に挙げた活用変化表の後に、派生接辞に関する説明が続いている点を指摘しておきたい。この派生接辞に関する記述も約 1 丁半分量である。その内容を以下の (3) に示す。

(3) 副詞ニ相当スル一綴ヲ語根ニ加ヘテ、新ニ一動詞ヲ作ルコトアリ。右ノ如

- (一) ša še šo mi ce ja je jo コノ八綴ハ反覆再帰又ハ不定や連続ノ意
- | | | | |
|-------------|---------|------------|-------|
| šasihalambi | 口嘗メスリスル | durgembi | 震動ス |
| šasihašambi | 乱リニ——スル | durgecembi | 絶ズ震動ス |
- (二) nu ndu ca ce co コノ五綴ハ相互ニ. 都. 衆テ. 互ニ. 各位. 一斉ノ意
- | | | | |
|------------|--------|-------------|------|
| injembi | 笑フ | omimbi | 飲ム |
| injenumbi | 衆人都テ笑フ | omicambi | 共ニ飲ム |
| injendumbi | 斉ク笑フ | songgombi | 哭ス |
| injecembi | 一斉ニ笑フ | songgocombi | 共ニ哭ス |
- (三) nji 此ノ一綴ハ来リ又ハ来ルノ意
- | | | | |
|-------------|-------------|--|--|
| fonjimbi | 問フ | | |
| fonjinjimbi | 来リ問フ. 問ニ来ル. | | |
- (四) ne [sic.na] ne no 此ノ三ハ行キテ又行クノ意
- | | | | |
|----------|-------|------------|-------|
| alambi | 告ク | ebišembi | 浴ス |
| alanambi | 行キテ告ク | ebišenembi | 浴シニ行ク |

- (五) na 此ハ外ニ向テ発展ノ意
banjimbi 生ス banjinambi 生長ス
- 六 je ju [sic:jo] 此ノ二綴ハ自壊自損ノ意
efulembi 折壊ス
efujembi 自敗ス自壊ス le ノ一綴ヲ附セサルニ注意
fondolombi 口ヲ創決ス
fondojobi 自ラ崩ル. 自決ス（水ノ）
- 七 bu 此ノ一綴ヲ附シタル動詞ノ上ニ de 又ハ be ノアル時ハ其意ヲ異ニス
arambi 書ク
be arabumbi 書カシム
de arabumbi 書カサレル
- （句読点は筆者によるが、原文の読点は「.」で記す。旧漢字は新漢字に改める）

(3)は Möllendorff（1892）からその内容を直接的に引用、日本語訳したものではない。恐らくは Möllendorff（1892: 8）の内容を渡部なりに整理して、その中から主だった接辞を挙げたものと思われる⁹⁾。

3. 『初歩』と『教科書』の対応関係

上原（1966: 58-59）は『初歩』第11以降における『教科書』からの転載箇所について詳細に言及しているが、それを整理すると【表2】のとおりである。

【表2】 上原（1966）が指摘する『初歩』と『教科書』の対応関係

『初歩』		『教科書』	『初歩』		『教科書』
課	分割番号		課	分割番号	
第11	1～6	29課と同文	第16	1～8	40課の全文
	7～12	59課と同文		9～15	51課の全文
第12	1～2	24課の一部	第17	1～8	44課の全文
	3～8	31課と同文		9～16	41課の全文
	9～15	15課を一部改変	第18	1～8	45課の全文
第13	1	12課		9～15	48課の全文
	2	未詳	第19	1～5	56課の前半
	3	21課		6～11	39課の全文
	4～7	37課	第20	1～9	50課の全文
	8～10	未詳		10～13	42課の全文
第14		未詳	第21	1～15	58課の全文
第15	1～5	32課の大部分			
	6～12	33課の全文			

【表2】のうち、網掛箇所は筆者の調査でも同様の結果を確認できたが、網掛以外の箇所は以下に挙げる大きく3点において上原の記述と齟齬が見られた。

第一に、各課内の分割番号に誤植に近い齟齬がある。【表3】がその正誤表である。分割番号が間違っているだけで『教科書』の対応箇所は正しい。

【表3】 分割番号の正誤表

誤	正	誤	正
第11 7～12	第11 7～11	第18 1～8	第18 1～7
第12 9～15	第12 9～10	第18 9～15	第18 8～15
第15 6～12	第15 7～12	第21 1～15	第21 1～10
第16 9～15	第16 9～18		

【表2】のうち、第15について補足する。『初歩』の第15は、『教科書』の二つの課の内容をそれぞれ部分的に切り取って一つに合わせる形でできている。前半の分割番号1～5は『教科書』32課に、後半の7～12は同33課に典拠を求めることができるが、その間にある6は典拠を求められない。6の一文は恐らく渡部の手による作例である¹⁰⁾。では、なぜ渡部はこのような改変を加えたのか。『初歩』第15の全文は以下に挙げる(4)のとおりである。

- | | |
|--|----------------------|
| (4) 1. fosen tuktan tucike, | 日光初メテサシタ (出タ) |
| 2. coociyanli gasha dele fejile, | 汝鳥(嘴長脚長ク尾ノ短キ小鳥)上下(ス) |
| 3. emhun kotoli -i jahūdai goro ci jihe, | 一箇ノ帆ノ船ガ遠クヨリ来レリ |
| 4. necin usin -i maise luku, | 平ナル田ノ麦子ハ茂リ |
| 5. duin dere gemu niowanggiyan, | 四面皆青イ |
| 6. <u>usin dolo omo bi</u> | <u>田ノ中ニ池アリ</u> |
| 7. omo -i muke bolgo oho, | 池ノ水ハ清クアリ |
| 8. irenere nimaha muke de amcambi, | 泳ク魚ハ水ヲ追フ |
| 9. gaitai dele gaitai fejile, | 或ハ上ニ或ハ下ニ |
| 10. emu ajige jui, welmiyeku be jafame, | 一童子釣竿ヲ持チ |
| 11. omo -i dolo saniyame dosifi, | 池ノ中ニ伸シ入レタラ |
| 12. nimaha gemu facame genehe, | 魚ハ皆散シ去ツタ |

後半出だしの7は「omo -i muke 池ノ水」が主語であり、前半の話につなげるには唐突であると渡部は判断したのだろう。4で「usin 田」が話題になっている点を利用し、6の一文を追加することで、前後のつながりを自然にしようとしたものと思われる¹¹⁾。

第二に、『教科書』の該当課の数字などにも誤植に近い齟齬がある。【表4】がその正誤表である。

【表4】『教科書』対応課の正誤表

	誤	正
第12 3～8	31課と同文	30課と同文
第20 10～13	42課の全文	42課の一部

第三に、上原が『教科書』に典拠を求められずに、未詳ないしは不明と述べている箇所のうち、筆者の調査で『教科書』に典拠を求められた箇所がある。

上述のとおり上原は「第十一以下は、第十四を除いて」、『教科書』から転載したものと述べるが、上原が例外とした第14にも典拠があるのみならず、第9と第10も『教科書』に典拠がある。また、【表2】に示したとおり、上原は第21の1～15まで全てが『教科書』58課に対応すると述べているが、【表3】に示したとおり『教科書』の58課に対応するのは第21の1～10であり、11～15は別の課に典拠がある¹²⁾。整理すると【表5】のようになる。

【表5】上原（1996）が未詳とした箇所の典拠

課	分割番号	『教科書』	課	分割番号	『教科書』
第9	1～8	第22課	第14	2	25課
第10	1～8	第23課		3～6	27課
	9	未詳		7～9	25課
第13	2	57課	第21	11～12	11課
	8	12課 or 57課		13	18課
	9～10	未詳		14～15	19課
第14	1	47課			

【表5】のうち、第10の9と第13の9～10は、筆者の調査でも典拠未詳のままである。該当箇所は以下の(5)、(6)の下線部である。(5)は第10、(6)は第13の全文である。

- | | | |
|-----|----------------------------------|-----------|
| (5) | 1. uju julesi ombi, | 首ハ前ニ向フテアル |
| | 2. juwe gala necin ombi, | 両手ハ平デアル |
| | 3. ici bethe ikūmbi, | 右脚ヲ屈ス |
| | 4. hashū gala [bethe] saniyambi, | 左手ヲ伸ス |
| | 5. yasa tuwame mutembi, | 目ハ見能フ |
| | 6. gala jorime mutembi, | 手ハ指シ能フ |

- | | |
|---|---------------|
| 7. angga ci gisun tucimbi, | 口ヨリ言葉出 |
| 8. ilenggu de amtan ba [sic. be] sambi, | 舌デ味ヲ知り |
| 9. <u>šan de donjimbi</u> | <u>耳ニテ聞ク。</u> |

(5)で9を挿入したのは、1～8までに「首、手、足、目、口、舌」が話題になっているので、ついでに「耳」も追加しておこうといったところであろうか。

- | | |
|---|-------------------------------|
| (6) 1. abka tuktan gereke, | 天初メテ明ケタ |
| 2. šun wesihun mukdeke, | 太陽昇ツタ |
| 3. šanyan tugi genehe, | 白雲去ツタ |
| 4. suwayan ilha -i fisa de, | 黄牛ノ背ニ |
| 5. aduci ajige jui teme, | 牧馬ノ小児ハ坐シ |
| 6. angga de foholon hetu ficakū be ficame, | 口ニ短キ横笛ヲ(笛)吹キ |
| 7. wesihun wasihūn amasi julesi yabumbi, | 後ト先東西ニ行ク |
| 8. šun wasihūn wasifi, | 太陽ハ西(下)ニ下リ |
| 9. <u>aduci ajige jui ihan -i fisa de jai teme boode mariha,</u> | <u>牧馬ノ小児ハ黄牛ノ背ニ再ヒ坐シ家ニ回リ来レリ</u> |
| 10. <u>dobori sidende manju bithe hūlame nikan hergen be urebuhe,</u> | <u>夜間満洲書(ヲ)読ミ支那字ヲ習ヘリ</u> |

(6)において9は1～8の話題を完結させるために、10は続く第14の話に続けるために、それぞれ挿入されたものと思われる。続く第14の冒頭は以下の(7)のように始まる。

- | | |
|---|--------------|
| (7) 1. ajige jui tacikū de dosinaha [dosinafi], | 小児(ハ)学校ニ行キタリ |
| 2. sefu henduhengge, | 先生ノ言ヒシ事ハ |
| 3. dobori erdeken -i amgakini, | 夜ハ早ク眠ル様ニ |
| 4. 以下省略 | |

以上、3章で考察してきた点をもとに、筆者が調査した結果の『初歩』と『教科書』の対応関係を改めて示すと、【表6】のとおりである。

【表6】『初歩』と『教科書』の対応関係

『初歩』		『教科書』	『初歩』		『教科書』
課	分割番号		課	分割番号	
第9	1～8	22課の全文*	第15	1～5	32課の一部*
第10	1～8	23課の全文*		6	未詳
	9	未詳		7～12	33課の一部
第11	1～6	29課の全文	第16	1～8	40課の全文
	7～11	59課の一部		9～18	51課の全文*
第12	1～2	24課の一部	第17	1～8	44課の全文
	3～8	30課の全文*		9～16	41課の全文
	9～10	15課の一部*	第18	1～7	45課の全文
第13	1	12課の一部		8～15	48課の全文*
	2	57課の一部*	第19	1～5	56課の一部
	3	21課の一部		6～11	39課の全文*
	4～7	37課の一部	第20	1～9	50課の全文*
	8	12課または57課の一部		10～13	42課の一部*
	9～10	未詳	第21	1～10	58課の全文
第14	1	47課の一部*		11～12	11課の一部
	2	25課の一部		13	18課の一部*
	3～6	27課の一部		14～15	19課の一部
	7～9	25課の一部*			

(*は何らかの形で渡部の手による改変がある箇所)

4. 『初歩』の独創性

3章では『教科書』に典拠を求められる箇所について考察を行なった。次に本章では『教科書』に典拠が求められない第1から第8までについての考察を行ないたい。『教科書』から転載した第9以降は、一部文言の追加修正を加えつつ複数課の順序を組み替えた編集に渡部の創意工夫があると言えなくもないが、基本的にその独創性は『教科書』の編者である榮徳にある。したがって、以下の4.1で述べる一部の語句を除き、『教科書』に直接的な典拠を求められない、第1から第8までの内容に『初歩』の独創性はあると言える。

4.1. 参考箇所

上原（1966: 58）は『初歩』第1から第10について「これらの文例が何に拠っているのを明らかにし得ない。わが国の満州語^{ママ}学習者が一般にそうであるように、筆者もまた入門的書物を学んだことがないので、これらの文例が何に載っているかを知らない」と述べる。第9・第10が『教科書』に典拠を求められるのは上述したとおりであるが、筆者の調査によると、『初歩』

広島大学中央図書館浦文庫所蔵『満洲語ヲ学ブ初歩 (manju gisun tacibure tuktan bithe)』について (松岡)

第1～第3にもわずかながら、他の課と同様、『教科書』の巻1を参考にして作られたと思われる箇所がある。まず、【表7】は全く同じ語句が『教科書』に確認される語句である。

【表7】『初歩』第1～第8に見られる『教科書』からの転載

『初歩』		語句	『教科書』
課	分割番号		
第1	6	alin den	8 課
	7	muke golmin	8 課
第3	1	edun labdu	8 課
	2	aga komso	8 課
	4	niyengniyeri edun	14 課
	5	juwari aga	14 課

次に、【表8】は『教科書』と全く同じではないものの、2語からなる語句のどちらかが別の語に置き換わっているだけで、明らかに『教科書』を参考にしたと思われる語句である。第1・5の「biya dosika」は教科書6課にある「šun dosika」と「biya tucike」を合わせたように見え、第2・1の「amba morin」と2の「ajige ihan」は、『教科書』7課にある「amba ihan」を分割したように見える。

【表8】『教科書』を参考にしたと思われる語句 I

『初歩』			『教科書』	
課	分割番号	語句	課	語句
第1	4	šun mukdeke	6 課	šun dosika
	5	biya dosika		biya tucike
	10	usiha genggiyen	9 課	biya genggiyen
第2	1	amba morin	7 課	amba ihan
	2	ajige ihan		ajige indahün

最後に、【表9】も『教科書』と全く同じではないものの、明らかに『教科書』を参考にしたと考えられる語句である。『教科書』が「形容詞＋名詞」となっている語順を「名詞＋形容詞」に逆転させただけで使用している語は同じである。

【表9】『教科書』を参考にしたと思われる語句 II

『初歩』			『教科書』	
課	分割番号	語句	課	語句
第1	8	orho niowanggiyan	14 課	niowanggiyan orho
	14	ilha fulgiyan	14 課	fulgiyan ilha

以上、【表7】から【表9】に挙げた箇所以外は、現状、直接的な典拠は求められないので、渡部による作例であると考えられる。特に、第5から第8の内容は、渡部が満人成蔚氏から満洲語を学んだときの内容や¹³⁾、渡部の大陸生活における経験などが反映している可能性もあり、興味深い。『初歩』第1から第8の全文は本稿末尾に「付録」として載せてある。

4.2. 教育的な工夫

上原は『初歩』第2と第4の例をもって、(8)のように述べている。

- (8) 第二は amba morin (大ナル馬)、ajige ihan (小サキ牛) の類、第四は bi si (我ト汝)、si i (汝ト彼) のような類の語句を、他はすべて短文の類である。「教科書」自体は単語から始められているに拘らず、これらの例が単語から始められないで、1部句を含んではいるが、主として短文から始められていることは、言語教授の理論に合致している点で、注目すべき1事実である。
(上原 1966: 58)

『教科書』巻1の出だしは、1課から5課までは1語のみ(2課にある sargan jui のみ2語)、6課から8課までは2語からなる語句や短文(hūwa -i doloのように属格助詞「-i」を含めると3語もある)、9課以降は3語以上からなる語句や短文といったふうに徐々に語数が増えていくが、(8)に挙げた上原の指摘はこのことを言っている。『初歩』は最初から2語からなる語句で始まるが、徐々に語数が増えていくスタイルは『教科書』と同じである。

だが、『初歩』の特徴は、語句や短文から始まり徐々に語数が増えていくだけではない。上原(1966)は述べていないが、満洲語の文構造や文法形式の導入方法などにも工夫が見られるのである。以下、逐一用例は挙げないが、この点は末尾の「付録」を参照いただきたい。

『初歩』の第1は「名詞＋形容詞」、「名詞＋動詞」からなる主語・述語の単文構造から始まる。語数は2語である。唯一、9の「moo sak fik」(後述するように「sak」は「šak」の誤り)のみが3語であるが「sak fik」は合わせて1語と見ても差し支えはないだろう。動詞の活用語尾は辞書形である「-mbi」と形動詞形「-ha」の例が挙がっており、「-ha」は終止形の用法のみである。

第2は「名詞＋名詞」、「形容詞＋名詞」からなる名詞句構造の課である。語数はまだ2語で

あり、10の「ehe sargan jui」のみ3語であるが、「sargan jui」で「女兒」の意なのでこれも合わせて1語と見て差し支えないだろう。

第3からは語数が3語以上に急に増えるが、依然として単文構造である。文法は助詞のうち与位格の「de」から導入される。動詞の活用については第1で既に導入されていた形動詞形「-ha」の連体形用法が追加される。

第4は人称代名詞のうち、まずその主格と属格形のみが導入される。人称代名詞を二つ並べることによって「AとB」の構造が無助詞であることも示している。

第5では指示代名詞「ere」と「tere」が導入される。第4で導入した人称代名詞はこの課でさらに与位格、対格形も現れる。よって通常の対格助詞「be」もこの課で導入される。また、動詞の活用については8の「minde jiha be bu」のように語幹の命令形が導入される。命令形は11の「jio」のように不規則活用する動詞も挙げてある。以上、第5までは全て単文構造からなっている。

第6からは複文構造が導入される。1の「bi ama de dahame bedune yabure」のように副動詞形「-me」が現れる。第3で既に導入されていた「-ha」に加え、この課で形動詞形「-ra」も導入される。「-ra」は上述1の「yabure」のような終止形の用法と11の「yabure erin de …」のような連体形の用法がそれぞれ挙がっている。第6ではまた疑問形の「-o」が導入され、助詞は属格の「-i」が追加される。

第7では、第6で導入された副動詞形「-me」に加え「-fi」が導入される。この課ではさらに否定形「akū」も導入されるが、この否定形についてはやや考察が必要であるため、4.3で再度ふれる。最後に、第8では「-habi」、「-ki」などの語尾が新たに導入される。

このように『初歩』の第1から第8は、少しずつ段階的に複雑な文構造や活用語尾などが導入され、かつそれはボトムアップ式になっているのである。どのような順序で初学者に満洲語の文法を教えたらいと渡部が考えていたか、ここから窺い知ることができる。

4.3. 特殊な満洲語

上原は、『初歩』第1の満洲語に不自然な点があるとして、(9)のような指摘をしている。

- (9) moo ^マsake fik を「木ガ茂ル」としているが、sak は šak の誤りである。ところで šak fik が何か動詞であるような感を与えているが^{s14)}、šak fik は草木密生の貌を意味する副詞で、「こんもりと」に当る。「茂ル」という動詞的訳ではなくて、「茂ッテイル」という状態的なものでないと当らない。完全な文とするなら、moo šak fik banjimbi (ombi) とでもすべきところである。(上原 1966: 57-58)

上原が指摘するように「šak fik」のような擬声擬態語が述語的に使われている用例を筆者も

見たことはない。実際、「moo šak fik」については『初歩』第11の8（すなわち『教科書』巻1の59課）に「orho moo šak fik oho 草木繁茂セリ」という用例があり、ここでは「šak fik」の後ろに「oho」がついている。しかし、筆者は上原が(9)で指摘するような渡部の単なる理解不足だとは考えない。『初歩』に転載されてはいないが、『教科書』巻1の9課に「bujan fik 林茂」という用例があるためである。すなわち、渡部は『初歩』第11に現れる「orho moo šak fik oho 草木繁茂セリ」を理解させる前段階として、この「bujan fik 林茂」を参考にして「bujan」を「moo」に入れ替え、「šak」を加えることで、第1で導入したのではないかと筆者は考えるのである。ただし、このような擬声擬態語の述語的使用が果たしてどれほど一般的であったのかは今後さらなる研究が必要である。

一方で、上原は具体的に指摘していないものの、『初歩』には誤植や特殊な満洲語の例も見られる。末尾の「付録」に示したように満洲語のつづり字の誤植は比較的多く、圈点の有無に關するものが目立つ。『初歩』が謄写版印刷である点は差し引くべきだろうが、同じ誤植が複数回現れている語句は、渡部の理解が反映していると言ってもよいだろう。例えば、渡部は『初歩』のみならず、『日満語類集語彙』など他の編著書でも「honin 羊」を常に「hūnin」と表記している。以下、紙面の関係上、特殊な満洲語の例のみいくつか挙げる。

- (10) a. bi ama de dahame bedune yabure 我ハ父ニ從フテバドナニ行カン [第6・1]
 b. maimašara manju niyalma monggo -i labdu bimbi
 売買スル満洲人ハ蒙古ニ多ク居ル [第7・5]

(10)は日本語からの干渉が起こったと思われる例である。(10a)は「随行する、つき従う」の意ならば「ama **be** dahame」、(10b)は「-i」を具格助詞として使っているものと思われるが「monggo **de** labdu bimbi」がそれぞれ自然に見える。

(11)は語順がやや特殊な例である。

- (11) omo -i dolo jahūdai šu ilka [sic. ilha] de teme sargašambi
 池ノ中ノ舟ニ坐搭シ蓮華ヲ賞観ス [第7・7]

(11)の満洲語の語順では日本語訳のような意に解釈できないように思われる。「omo -i dolo jahūdai de teme šu ilha (be) sargašambi」あるいは「omo -i dolo šu ilha (be) jahūdai de teme sargašambi」あたりが日本語訳に近いだろうか。

(12)は、管見の限り他の文献にはあまりない、やや珍しい用例である。

- (12) a. bi jahūdai inu sejen de jinu [sic. inu] tembi akū,
我ハ舟モ車ニモ乗ラス [第7・9]
- b. inenggidari bele -i buda jefi nuru umifi [sic. nure omifi] urumimbi akū,
日毎ニ米ノ飯ヲ食ヒ酒ヲ飲ミ (飲メバ) 飢ヘズ [第8・12]
- c. enenggi ilha be sargašara wesihun alin de yabumbi,
今日花ヲ鑑賞ス可ク東山ニ行ク [第6・2]
- d. manju bithe be tacibure sefui boode cimari yabure,
満洲書ヲ学フ (為) ニ先生ノ家ニ明日行カン [第6・4]
- e. bi cimari sakda ama be tuwara girin de yabure,
我ハ明日老父ヲ省ル可ク吉林ニ行カン [第6・10]
- f. ya uruke manggi ヤー飢タヨ [第8・9]
- g. minde jiha be bu labdu 我ニ錢ヲ呉レロ沢山 [第5・8]

(12a)、(12b) は否定形の例だが、動詞の否定なので「-rakū」の形が一般的なように思われる¹⁵⁾。(12c)～(12e) は、形動詞形の「-ra」が副動詞的に用いられている例であるが、この「-ra」は「-me」のほうが自然に見える。(12f) は形動詞語尾「-ha」のあとに来る「manggi」の例であり、「～したら、～したあと」といった意味で使うのが一般的であると思うが、ここではモダリティを表す終助詞 (文末後置詞) のように使われている¹⁶⁾。(12g) は「labdu (多い)」を副詞的に用い、さらにそれが語末に来ている例である。これらの用例に対して筆者は、渡部が満洲人成蔚氏から学んだ、20 世紀初頭の満洲人が使用していた口語の満洲語には、こうしたややブロークンでクレオール的な用法が存在していたのではないかと、そして渡部はそれを意図的に『初歩』に載せたのではないかと考える。渡部は『満洲語文典』のような文法書も編んでおり、初歩的な間違いをするとは思えないからである。

5. 結論

本稿では従来上原 (1966) を通じてでしか知ることのできなかった『初歩』の内容についてより詳細な考察を行なった。『初歩』の大部分は上原が指摘するように『教科書』に典拠を求められるが、本稿ではまず、『初歩』と『教科書』の対応関係など、上原の指摘にはいくつか誤認があることを指摘した。次に、『初歩』には『教科書』に典拠を求められない箇所もあるが、そこには特殊な満洲語の用例が見られることを指摘した。これらは渡部の手による作例だと考えられるが、当時の満洲人が実際に使用していた口語の満洲語が反映している可能性もある。また、『教科書』に典拠を求められない箇所からは、どのような順序で初学者に満洲語の文法を導入すべきと渡部が考えていたのかを窺い知れることも明らかにした。以上のような『教科書』

に典拠を求められない箇所こそ『初歩』の独創性があり、資料的な価値があると言える。

注

- 1) 1944 (昭和19) 年から大阪外事専門学校、1949 (昭和24) 年から大阪外国語大学を経て、2007 (平成19) 年からは大阪大学に併合される。
- 2) 1922 (大正11) 年に入学した第1期生のみ、2年次の満洲語の授業は予定通りに開講されず、3年次の1年間のみ開講された (松岡 2023)。
- 3) 渡部薫太郎の略歴については、石濱 (1936)、上原 (1965)、長田 (2022, 2023) などが詳しい。なお、大阪外国語学校蒙古語部における満洲語の位置は、渡部の死去とともにロシア語に取って変わった。
- 4) 直接、広島大学図書館のOPAC蔵書検索 (<https://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/>) で「満洲語ヲ学ブ初歩」と検索すると出てくる。請求記号は「ウラ/340/3」、資料IDは「0100014021」。『広島大学浦文庫目録』 (広島大学附属図書館編、1982年) にも確認される。
- 5) 精松源一 (1903-1993) は大阪外国語学校蒙古語部の第1期生であり、渡部から直接満洲語を学んだ者の一人である。卒業後は一度郷里の鹿児島で学校教員をしていたが、1930 (昭和5) 年に母校の大阪外国語学校に呼び戻され、以後、モンゴル語を教える。戦後も引き続き大阪外国語大学のモンゴル語学科で長年教鞭をとった。
- 6) 一部、『初歩』の分割番号とその日本語訳が対応していない箇所もある。一例を挙げると、『初歩』の第8は全12分割であるが、その日本語訳には4の次が6になっており、5は4の文とまとまっている。
- 7) 一部、『初歩』の分割番号と『教科書』の切れ目が対応していない箇所もある。この場合、もっぱら『教科書』では切れ目があるのを『初歩』では一つにまとめている。
- 8) (2) の中には、Möllendorff (1892: 10) と完全に一致しないところもある。Möllendorff では、19項目に「Passive *arambumbi* it is written」、20項目に「Causative and Passive *arambubumbi* I cause to be written」とあるが、『初歩』で「arambumbi」を「arabumbi」にしたのと併せて、(2) のように分けたのは渡部の手による改変である。また、21項目の「*araharangge*」は、Möllendorff では「*arahangge, ararangge the writing, the writer*」とあり、こちらはMöllendorffが正しいように思われる。同様に22項目もMöllendorffでは「*arahale, ararale whoever writes*」と二つの語形が併記されている。
- 9) (3) とほぼ同じ内容は渡部の手による『満語文典』 (1918) の31丁表～33丁裏、及び、『満語文典』を改訂した『満洲語文典』 (1926) の70～74頁にもあり、こちらではさらに詳細な記述がなされている。なお、『満語文典』と『満洲語文典』はともにMöllendorff (1892) をもとに作られたものである。
- 10) 『初歩』第9以降で『教科書』の例文を編集、転載するにあたり、渡部の手で改変が加えられた箇所は他にもある。紙面の関係上、以下にその一例を挙げる。いずれも文脈をより自然にすることなどを目的とした軽微な改変であると思われる。なお、用例中の下線部は『初歩』で追加されている語句、取り消し線は『初歩』で削除されている語句、[] は『初歩』で改変される前の『教科書』の形である。

<第9>

1. pe cing ci antaha isinjiha bi,
2. booi dolo dosifi,
3. bi antaha be aktombi [sic. okdombi],

北京ヨリ客到来シダテアル
家ノ中ニ入り
我客ヲ迎フ

- | | |
|--------------------------------------|------------------|
| 4. derei dalbade ilimbi, | テーブルノ辺ニ起ツ |
| 5. ama antaha de acambi, | 父客ニ見ミユ |
| 6. antaha -i hala gebu be fonjimbi, | 客ノ姓名ヲ問フ |
| 7. ama ici ergide tefi [tembi], | 父ハ右ノ方ニ <u>坐シ</u> |
| 8. antaha hashū ergide tehe [tembi], | 客左ノ方ニ <u>坐セリ</u> |

<第 12>

(前略)

- | | |
|---|-----------------|
| 6. <u>tinggin</u> -i <u>tuleri</u> de eyun sukū muhaliyan be forimbi, | 庭ノ外ニ於テ姉ハ皮ノ毬ヲ打ツ |
| 7. non ceku de cekudembi, | 妹ハ鞦韆ニ上ル |
| 8. <u>ce</u> emde sargašame emde ilimbi, | 彼等ハ同ク遊ヒ同ク止ム |
| 9. <u>eyun</u> orho ninggu de teme [tembi], | 姉ハ草上ニ <u>坐シ</u> |
| 10. <u>non modan</u> ilha juleri de ilimbi, | 妹ハ牡丹花ノ前ニ立ツ |

<第 20>

- | | |
|---|------------------------|
| 1. <u>omo</u> -i dolo šu ilha tuktan fushufi, | 池ノ中ノ蓮花初メテ咲キ |
| 2. aḡige jahūdai de teme, omo [tenggin] -i dolo dosifi, | 小サキ舟ニ坐シ <u>池</u> ノ中ニ入り |

(中略)

- | | |
|--|--------------------|
| 7. hoton -i hūdai bade dosifi, | 城ノ市場ニ行キ (入り) |
| 8. juwe <u>amba</u> nimaha be uđafi, | 二ノ大ナル魚ヲ買ヒ |
| 9. yafahalame boode marihabi, | 歩シテ家ニ回リ来レリ |
| 10. <u>ere</u> ninenggi [sic. inenggi] sunja biya [biyai] sunjangga inenggi <u>oho</u> , | 此ノ日ハ五月五 (?) ナル日ナリシ |

(中略)

- | | |
|--|-------------|
| 13. <u>tere</u> suwayan nimaha amtan sain <u>oho</u> , | 其ノ黄魚ノ味ハ美ナリシ |
|--|-------------|

<第 21>

- | | |
|-----------------------------------|-----|
| 13. suje [boso] nadan defelinggu, | 帛七疋 |
|-----------------------------------|-----|

なお、<第 9> の 1 で北京を「pe cing」と表記しているのは、当時の満洲人がこのように発音していたのを反映したものと思われる。

- 11) 6 で意味したいのは、見渡す限り一面に田圃があるその中のどこかに池があるということだろうが、少々苦しい気がしなくもない。日本語訳のようにするならば、「usin -i dolo **de** omo bi」のように助詞を入れたほうがよいようにも思われる。
- 12) 『初歩』第 8 の末尾には「uruci 以下ハ前ノ課トハ趣ヲ異ニシ時ニ長篇アリ時ニ短篇アリト雖トモ終始一貫セルモノトス」という注釈がついている。この注釈は第 9 以下が本格的に『教科書』からの転載であることを示唆している。
- 13) 渡部は『満語文典』(1918) の冒頭にある「満語学叢書発刊之辞」の中で「日露戦役の血痕未だ乾かず、腥風北鮮の山野に咲く時、射利の目的を以て女真の故地、即清の発祥地と称する間島に來り。偶支那文学に精通せる満人成蔚氏と相知り、日満語学の変換教授をなせり。これ余か満語を研究する第一歩とす。」と述べている。
- 14) 渡部は『日満語類集語彙』(1929) の 36 丁表でも「šak fik」を動詞類の中に入れているので、動詞の一つと見なしていた可能性は高い。
- 15) 満洲語の否定形については Möllendorff (1892: 12) に以下のような記述があるので、渡部はこれを参考にした可能性もある。

Negation is expressed by *akū* not, is not (無, 不, 未, 没有), *waka* not, no (不是), *ume* (莫) do not, *unde* not yet, *umai* not, not at all.

When joined to the Present Tense *akū* simply follows: *bi gisurembi akū* I do not speak. With other verbal forms *akū* loses its *a*: *araha---kū* he has not written, *genehe---kū*, he did not go. Joined to the Future the *a* of *akū* remains: *arar---akū* he will not write, *gener---akū* he will not go.

なお、『満語文典』(1918)の42丁裏の「動詞ノ打消法」には、上の箇所を参考にしたと思われる次のような内容がある。

満洲語ノ打消ハ右ノ語ヲ動詞ノ前若クハ後ニ附シテ、或行動又ハ存在ヲ打ち消ス。其語ハ邦語ト大差ナシ。

イ *akū* ナシ、デナシ、アラズ、ニアラズ。漢字ノ無、不、未、没有ニ相当ス。

一 現在ヲ打消ス時ハ、現在動詞ノ下ニ、コノ *akū* ヲ附ス可シ。

bi gisurembi akū 我話サズ

二 (以下省略)

(以上、下線や句読点は筆者による。旧漢字は新漢字に改める)

16) 松岡(2024)では『教本』における満洲語の日本語訳と渡部の手によると考えられる『教科書』の書き込み箇所の対応関係を調査したが、「*jasigan be ulara kuwecihe* 傳書鴿」の課に1例だけ「*-ha manggi*」の用例が見られる。該当箇所は以下のとおりで、(a)は『初歩』(すなわち『教科書』)の本文満洲語、(b)は『教科書』の書き込み、(c)は『初歩』の日本語訳である。『教本』の日本語訳は『初歩』のものと似ており、『教科書』の書き込みから渡部は「*-ha manggi*」が本来「～したあと」の意であることも理解していたことが分かるので、『初歩』の日本語訳は意図的なものであったことになる。

(前略)	(a)	<i>kioi</i>	<i>duwan</i>	<i>tinggin</i>	<i>-i</i>	<i>siden</i>	<i>de,</i>	<i>horin</i>	<i>be</i>
	(b)	曲	端ハ	庭	ノ	間	ニ於テ	籠	ヲ
	(c)	曲	端	庭	ノ	間	ニ於テ	籠	ヲ
	(a)	<i>neifi</i>	<i>emu</i>	<i>kuwecihe</i>		<i>be</i>	<i>sindame</i>	<i>genehe</i>	<i>manggi,</i>
	(b)	開キ	一ノ	鳩		ヲ	放チ	ヤリシ	後
	(c)	開キ	一	鳩		ヲ	放チ	出シタヨ	(後略)

また、『日満語類集彙纂』(1929)の31丁裏にも「*manggi*」が載っているが、その日本語訳は「ナリ、乎、哉」となっており、こちらも『初歩』の日本語訳に通じる。

参考文献

- 石濱純太郎(1936)「故渡部薫太郎先生」『東洋史研究』2-1: 92-94。(高田時雄編(2018)『石濱純太郎 續・東洋學の話(映日叢書 第四種)』、臨川書店に再録)
- 上原久(1965)「渡部薫太郎の満洲語学(1)」『埼玉大学紀要 人文科学篇』14: 1-17.
- 上原久(1966)「渡部薫太郎の満洲語学(2)」『埼玉大学紀要 人文科学篇』15: 1-60.
- 長田俊樹(2022)「宣教師的語学者・渡部薫太郎——石濱シュレーの人々(1)——」『KOTONOHA』233: 1-44.
- 長田俊樹(2023)「石濱シュレーに集う言語学者たち」『国際シンポジウム論文集 内藤湖南と石濱純太郎 近代東洋学の射程——内藤・石濱両文庫所蔵資料を中心に——』(玄幸子編著、関西大学出版部): (65)-(96).

広島大学中央図書館浦文庫所蔵『満洲語ヲ学ブ初歩 (manju gisun tacibure tuktan bithe)』について (松岡)

松岡雄太 (2023) 「大阪大学附属図書館石濱文庫所蔵『manju gisun tacibure hacin -i bithe (満洲語教本)』について」『関西大学外国語学部紀要』 29: 1-15.

松岡雄太 (2024) 「大阪大学附属外国語学図書館所蔵『満蒙漢三文合璧教科書』について」『関西大学外国語学部紀要』 31: 23-43.

Möllendorff, P.G. von (1892) *A Manchu Grammar with Analysed Texts*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press.

資料

『大阪外国語学校一覧』 大正 11 年度～昭和 18 年度

『満蒙漢三文合璧教科書』 (8 巻 10 冊)、榮徳[編]、宣統元年叙

渡部薫太郎 (1918) 『満語文典』、満語学叢書発行会

渡部薫太郎 (1924) 『manju gisun tacibure hacin -i bithe jai debtelin』 (満洲語教本 第 2 巻)、私家版

渡部薫太郎 (1926) 『満洲語文典』、大阪東洋学会

渡部薫太郎 (1929) 『日満語類集語彙』、私家版

【付録】『初歩』第1から第8の全文

[凡例]

- (a) 各課の「1. 2. 3. ...」とある番号は分割番号である。
- (b) 日本語訳は原文ではまとめて第10のあとに載っているが、ここでは便宜上、満洲語の右または直下に併記する。
- (c) 満洲語の表記や日本語訳において明らかな間違いの箇所には下線を引き、右側に正しい語形を[sic. 〜〜]として加える。正しい語形を判断しにくい箇所には「?」もつける。
- (d) 筆者による覚書は(➡〜〜)として加える。

<第1>

- | | |
|--------------------------------------|---------|
| 1. abka den, | 天ガ高イ |
| 2. na onco, | 地(ハ)廣 |
| 3. niyalma wesihun, | 人(ハ)貴イ |
| 4. šun <u>moktehe</u> [sic. mukdeke] | 日(ガ)昇ツタ |
| 5. biya dosika, | 月(ガ)入ツタ |
| 6. alin den, | 山高イ |
| 7. muke golmin, | 水(川)長イ |
| 8. orho niowanggiyan, | 草青イ |
| 9. moo <u>sak</u> fik, [sic. šak] | 木カ茂ル |
| 10. usiha genggiyen, | 星明イ |
| 11. gasha jilgambi, | 鳥(ガ)囀ル |
| 12. ilha fulgiyan, | 花紅イ |

<第2>

- | | |
|--|--------|
| 1. amba morin, | 大ナル馬 |
| 2. <u>ajike</u> ihan [sic. ajige] | 小サキ牛 |
| 3. labdu indahūn, | 多クノ犬 |
| 4. <u>komsu hūnin</u> [sic. komso honin] | 少ナキ羊 |
| 5. ici gala, | 右手 |
| 6. hashū bethe, | 左足 |
| 7. amargi boo, | 後ノ家 |
| 8. <u>julerki duka</u> [sic. julergi] | 前ノ門 |
| 9. sain jui, | 善兄 |
| 10. ehe sargan jui, | 悪女兄 |
| 11. <u>ajikan</u> jui [sic. ajigan?] | ヨリ小ナル兄 |
| 12. ambakan morin | ヨリ大ナル馬 |

<第3>

- | | |
|-----------------|-----------|
| 1. edun labdu, | 風多イ |
| 2. aga komso, | 雨少イ |
| 3. tucike tugi, | 出タ雲ガ(出タ雲) |

- | | |
|--|-------------|
| 4. niyengniyeri edun, | 春風 |
| 5. juwari aga, | 夏雨 |
| 6. bolori biya, | 秋月 |
| 7. tuweri nimanggi | 冬雪 |
| 8. wargi šanyan tugi tucike, | 東(ニ)白雲(ガ)出タ |
| 9. halhūn edun dambi, | 溫風ガ吹ク |
| 10. bolori biya wesihun de mukdembī, | 秋ノ月ガ東ニ昇ル |
| 11. juweri aga ambula agaha, | 夏雨大ニ降ツタ |
| 12. <u>duwari</u> de nimanggi nimarambi, [sic. tuweri] | 冬(ニハ)雪カ降ル |

<第 4>

- | | |
|--|----------|
| 1. bi si, | 我ト汝 |
| 2. si i, | 汝ト彼 |
| 3. suwe be, | 汝等ト我等 |
| 4. ce bi, | 彼等ト我 |
| 5. mini boo, | 我カ家 |
| 6. sini morin, | 汝ノ馬 |
| 7. ini <u>nihan</u> , [sic. indahūn or ihan?] | 彼ノ犬 |
| 8. meni <u>hūnin</u> , [sic. honin] | 我等ノ羊 |
| 9. cenī coko <u>šorko</u> [sic. šorho] | 彼等ノ鶏と雛 |
| 10. suweni buhū, | 汝等ノ鹿 |
| 11. <u>mani</u> morin jai cenī ihan, [sic. mini] | 我カ馬又彼等ノ牛 |
| 12. musei gurun | 御互ノ国 |

<第 5>

- | | |
|---|--------------------|
| 1. tere hehe <u>minbe</u> sambī, [sic. mimbe] | 彼女ハ我ヲ知ル |
| 2. i minde ere bithe be buhe, | 彼ハ我ニ此ノ本ヲ給ヘタ |
| 3. hūdaibade tere etuku udaha, | 市場ニ於テ彼ノ衣ヲ買ツタ |
| 4. ere sain morin ihan be <u>uncambi</u> , [sic. uncambi] | 此ノ良馬ト羊ヲ売ル [sic. 牛] |
| 5. <u>sefu</u> gucu mini boode jihe, [sic. suwe?] | 君等ト朋ハ我ノ家ニ来タ |
| 6. mini ama mukden de yabuha, | 我ガ父ハ奉天ニ行キシ |
| 7. sefu šabi ere niyalma de jiha bumbi, | 先生(ト)生徒ハ此人ニ錢ヲ給ヘタ |
| 8. minde jiha be bu labdu | 我ニ錢ヲ呉レロ沢山 |
| 9. usisi ambula <u>hūnin</u> tuwambi, [sic. honin] | 田夫ハ大数ノ羊ヲ看牧ス |
| 10. tere usisi coko be udambi, | 彼ノ田夫ハ鶏ヲ買フカ |
| 11. ini <u>bude</u> jio, [sic. boode] | 彼カ家ニ来レ |
| 12. ce monggo ucun be uculembi | 彼等ハ蒙古歌ヲ歌フ |

<第 6>

- | | |
|---|----------------|
| 1. bi ama de dahame bedune yabure, | 我ハ父ニ従フテベドナニ行カン |
| 2. enenggi ilha be sargašara wesihun alin de yabumbi, | 今日花ヲ鑑賞ス可ク東山ニ行ク |

3. sikse mini ahūn teo bi emde sefui boode yabuha, [sic. deo]
昨日我ノ兄弟ト我ハ共ニ先生ノ宅ニ行キシ
4. manju bithe be tacibure sefui boode cimari yabure
満洲書ヲ学フ(為)ニ先生ノ家ニ明日行カン
5. sikse ere bithe be mini yamun de banjiha, [sic. benehe or benjihe?]
昨日此ノ本ヲ我カ衙門ニ送ツタ
6. enenggi minde booi jasigan jihe, 今日我ニ家信カ来タ
7. ama eme ahūn deo eyun non gemu elhe kai 父母兄弟姉妹皆平安ナリ
8. si cimari bi emde sule sargašambio, [sic. sula?] 君ハ明日我ト共ニ遊歩スルカ
9. ere niyalma enenggi ere bithe arambio, 此ノ人ハ今日此ノ書ヲ写スカ
10. bi cimari sakda ama be tuwara girin de yabure, 我ハ明日老父ヲ省ル可ク吉林ニ行カン
11. yabure erin de monggo niyalma marira erin de manju niyalma be dahambi, [sic. marire]
行ク可キ時ニ蒙古人回リ来ル時ニ満洲人ヲ従ヘル
12. enenggi ilan (biya) nadan inenggi kai, 今日ハ三月七日ナリ

<第7>

1. mooi gargan de ilan gasha bi, 木ノ枝ニ三鳥カ居リ
2. muke dolo amba nimaha bimbi 水中ニ大ナル魚カ居ル
3. bigan de morin inu ihan ninu bi, [sic. inu] 野ニ馬モ牛モ居リ
4. bi liyooha antu de tembi, [hatu? or sic. hoton?] 我ハ遼陽^{イロハ}ニ住ム
5. maimašara manju niyalma monggo -i labdu bimbi, 売買スル満洲人ハ蒙古ニ多ク居ル
6. bayan usisi manju de labdu kai, 富裕ノ田夫ハ満洲ニ多イヨ。
7. omo -i dolo jahūdai šu ilka de teme sargašambi [sic. ilha]
池ノ中ノ舟ニ坐搭シ蓮華ヲ賞_レ観ス
8. bi sejen de tefi olkon de yabume jahūdai de tefi mederi be yabumbi, [sic. olhon]
我ハ車ニ坐シテ陸ヲ行キ舟ニ坐シ海ヲ行ク
9. bi jahūdai inu sejen de jīnu tembi akū, [sic. inu] 我ハ舟モ車ニモ乗ラス
10. amba jahūdai aibide bimbio, 大舟ハ何処ニアルカ
11. ere sejen de juwan niyalma teme mutembi 此ノ車ニ 人ハ乗リ能フ
(➡「人」の前の一字空きは「十」か?)
12. ama ici ergide teme bi hashū ergide tembi, 父ハ右ニ坐シ我ハ左側ニ坐ス

<第8>

1. bi inenggidari bele -i buda be jambi, [sic. jembi] 我ハ日毎ニ米ノ飯ヲ食フ
2. bi noru (arki) be umimbi, [sic. nure, omimbi] 我ハ黄酒(焼酎)ヲ飲ム
3. muke umimbi, [sic. omimbi] 水ヲ飲ム
4. urumbi urukebi, 飢ユ餓タ
5. monggo de inenggitari arjan be umike, [sic. inenggidari, omiha]
蒙古ニ於テ日毎ニ酸牛奶ヲ飲ミシ
6. ganggambi ganggaha, [sic. kangkambi kangkaha] 渴ス渴セリ
7. te buda jedeki, [sic. jeki?] 今飯食イタイ

- | | |
|--|---------------------|
| 8. arki be <u>umimbio</u> , [sic. omimbio] | 焼酎ヲ飲ムカ |
| 9. ya uruke manggi, | ヤー飢タヨ |
| 10. uruci buda be baimbi, | 飢タラ飯ヲ ム |
| | (➡「ム」の前の一字空きは「求」か?) |
| 11. i ganggaha -i jalin muke bu, | 彼ハ渴シタガ水ヲ給ヘヨ |
| 12. inenggidari bele -i buda jefi <u>nuru</u> <u>umifi</u> urumimbi akū, [sic. nure omifi] | |
| 日毎ニ米ノ飯ヲ食ヒ酒ヲ飲ミ (飲メバ) 飢ヘズ | |
| uruci 以下ハ前ノ課トハ趣ヲ異ニシ時ニ長篇アリ時ニ短篇アリト雖トモ終始一貫セルモノトス | |

